

毎月11日掲載

防災・減災のページ

第82回ワークショップ @富谷・東向陽台小

むすび塾

B班の7人とC班の8人は約180世帯が入居する大型マンション「向陽台サニーハイツ」を訪れた。同ハイツは入居者で町内会を構成しており、町内会長で同ハイツ管理組合法人理事長の須藤弘さん(74)、同法人副理事で民生児童委員の中村美代子さん(71)の2人が説明役を務めた。

須藤さんは当時、避難所とな

日本損害保険協会(東京)の安全教育プログラム「ぼうさい探検隊」を活用して実施した。

内陸部の富谷市は津波の危険性はないが活断層「長町1利府線断層帯」を震源とする断層型地震への警戒は必要とされる。富谷市防災安全課はこうした地域特性も踏まえ探検隊出発に先立ち、教室で防災講話をし、備えの大切さを強調した。講話後、児童はA・B・Cの4班に分かれ、学区内の3町内会に向かった。

A班の7人は東向陽台1丁目町内会を訪れた。町内会長の鈴木忠雄さん(80)は町内会館を案内しながら「震災時にはここが最大で約160人以上の住民が避難してきた」と説明。物置に備蓄してある水や食料なども紹介しながら「第一町内会では災害時に玄関先に掲げて安否を知らせるための小袋や、居場所を知らせるための笛などを配布して備えている」と話した。

震災避難所訪れマップ作り

河北新報社は9月27日、82回目の防災・減災ワークショップ「むすび塾」を富谷市の東向陽台小(及川芳彦校長、児童574人)で開いた。4年生29人が東日本大震災で避難所となった町内会施設を訪れ、住民の震災体験に耳を傾けた。学校に戻ると、見聞きした要点や安全上の注意点を大型の防災マップに書き込み、改めて防災意識を高めた。

むすび塾に参加して



東向陽台第一町内会を訪れたA班の(前列右から)福田佳祐君(10)、矢口怜君(10)、武田琉花さん(9)、栗原蒼太朗君(9)、外角(そとがく)葵さん(10)、田口心結(みゆ)さん(9)、高橋さん

●防災物資に驚き 震災の時に子どもがパンや水、バナナなどを近所の家に届けたことなどを知り、自分たちにもできることがあることを学んだ。防災倉庫には思っていたよりも、たくさんの方があって驚いた

＝阿部桜弥(さくや)君(9)



サニーハイツを訪れたB班の(前列右から)上田礼乃さん(9)、南川瑠那さん(10)、桜井安美佳さん(9)、渡辺綾音さん(9)、松川咲依(ひより)さん(9)、牧野蒼大さん(9)、阿部君

●できること探す もしも地震が起きたら、壊れたところに近づかず頑丈な高い建物に逃げようと思いました。避難したら、大人のお手伝いをしたり高齢者とコミュニケーションをとったり、できることを探したい

＝菅原莉亜奈さん(9)



サニーハイツを訪れたC班の(前列右から)高橋洋裕君(9)、野上正宗君(9)、菅原斗空(とあ)君(9)、桜井明香(あすか)さん(9)、北園咲空さん(10)、大久保君(10)、羽生千翼(ちひろ)さん(10)、菅原さん

●擁壁を付ける 地震は怖いと感じた。津波などいろいろな被害が出る。地域にあるブロックの擁壁は高く、崩れるかもしれないので気を付けたい。地震に備え、非常食や水など数日分の準備が必要なのも分かった

＝佐藤よつばさん(9)



東向陽台三丁目町内会と第二会館を訪れたD班の(前列右から)佐藤蒼空(そら)君(10)、佐々木侑宇(しゅう)君(9)、佐藤さん、三浦真緒さん(10)、阿部悠行(ゆあん)君(10)、武田しおりさん(9)、杉原帆風さん(9)

地域の備え 歩いて学ぶ



町内会を巡って学んだことをまとめ、防災マップづくりに挑戦する児童ら

9月27日、東向陽台小

た町内会館で撮影した写真を見せ、会館併設の防災倉庫も案内。「避難生活では子どもたちも助け合いの戦力だった。物資の運搬やラジオ体操、あひさつ運動など、みなさんも災害時には活躍してほしい」と強調。「生きていくのが一番だ。地震が起きたらまずは安全な高台に逃げよう」と訴えた。

中村さんも「子どもたちは、自分より小さな子に折り紙を教えるなどして面倒を見ていた」と振り返り、「災害はいつ起こるか分からないから心構えが大切。小学生でもできることがある。自分に向かえるのか考えてほしい」と話した。

D班の7人は東向陽台3丁目町内会長の山田悟さん(75)と地区内を歩いて危険箇所を点検した。東向陽台地区は丘陵地帯を開発した住宅地のため、高低差がある区域があり、一部には急斜面を覆う高さ約10メートルのブロック擁壁もある。山田さんは「大きな地震が来たら壁のブロックが崩れるかもしれない。近づくないように」と注意を促した。

点検後、3丁目にある東向陽台第二会館に着くと、山田さんは震災時に住民約100人が避難した



東向陽台サニーハイツ町内会館で防災倉庫を見学する児童ら＝9月27日、東向陽台小

富谷・東向陽台小

日本損害保険協会の「ぼうさい探検隊」

「ぼうさい探検隊」は、損害保険会社の事業者団体「日本損害保険協会」(東京)が2004年に始めた安全教育プログラム。子どもたちが地域にある防災や防犯などに関する施設や設備などを見て回り、身の回りの安全・安心を考えながらマップにまとめる。

年1回、マップの全国コンク

ルを実施して優秀作品を表彰する。探検隊の活動マニュアルも用意し、マップ作製に必要な文具キットを無償で提供している。

河北新報社は協会の協力を得て、むすび塾に探検隊のノウハウを取り入れて開いている。連絡先は同協会「ぼうさい探検隊マップコンクール」事務局03(6822)9355。

アドバイザーを務めた東北大災害科学国際研究所の保田真理講師(防災教育は「実際に町を歩き、地域の人から体験を聞くことができた。学んだことを忘れずに次の災害で生かすことができるよう行動していくことが大切だ」と語った。



急傾斜地警戒区域に

富谷市東向陽台地区は市南にあり、隣接する仙台市泉区向陽台地区と一体造成された住宅地。1970年代に宅地分譲が始まり東向陽台1・3丁目は8月末現在で計約3200人が住む。

地区の東側を通る県道仙三本木線沿いに急傾斜地があり、宮城県が今年3月、土砂災害警戒区域などに指定した。

内陸直下型地震への警戒も必要とされ、仙台市から利府町にかけて延びる活断層「長町1利府線断層帯」(長さ約40キロ)を震源とする地震が起きた場合、市内で最大の震度6強の揺れが想定される。

東日本大震災で当時の富谷町では震度6弱を観測。町の記録によると、町内で死者はいなかったが、町外で5人が死亡した。

震災当日から各地区の公民館や小中学校などに延べ1万3211人が避難し、東向陽台第一会館に515人(11年3月11日)、第二会館に156人(12年13日)、サニーハイツ町内会館には2690人(11年22日)が身を寄せた。

●B-C班 説明役 須藤弘さん
「震災では約200人が避難したんだ。避難生活では子どもも助け合いの戦力だったよ。大きな災害の時は住民同士の助け合いが大切だよ」

●A班 説明役 鈴木忠雄さん
「震災では最大163人が避難したよ。災害用品としてトイレペーパー、タオル、マスク、水、アルファ米などを備蓄しているよ。安否を知らせる黄色い袋や笛を配布しているよ」

●B-C班 説明役 中村美代子さん
「避難生活では子どもがより小さな子の面倒を見て折り紙遊びなどしていたよ。避難生活はストレスがたまりやすい。子どもでもできることがあるから考えて行動しよう」

●D班 説明役 山田悟さん
「震災では約100人が避難したよ。地震が起きたらブロック塀やがけは崩れるかもしれないから近付かないでね。長町1利府線断層帯による地震にも備えが大切だよ」

東日本大震災の体験を振り返り、専門家と共に防災の教訓や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)1501。

次回のむすび塾は25日、仙台市泉区市名坂で開きます。

助言者から 子どもも周囲の力に

東北大災害科学国際研究所講師 保田真理さん(62)

東日本大震災発生時の富谷市東向陽台地区の状況と、住民がどう避難し行動したかを小学生が地域の人に教わった。実際に町を歩き、体験と教訓を直接聞くことで児童が多くなることに気づき、自分に向かえるか考えたことは意義深い。

子どもたちは住民が町内会館に身を寄せて助け合ったことを聞き、災害時は自分も地域の人に守られると身をもって感じた。防災の視点で地域を見直すことで、地震で崩落の可能性のある急斜面に注意する、食料や水を備蓄する必要がある、避難所で物資を配るなど子どもも周囲の力になれることを学んだ。

同地区は内陸部で津波の心配はないが、長町1利府断層帯で地震が起きれば多大な被害が予想される。大事なことは次に災害が起きた時、子どもたちが自分の安全を守るようになること。そのために学んだことを実行することだ。あひさつ運動や非常食の備蓄など、できることから勝手に行動してほしい。家族にも話して学びを共有し、備えを進めてもらいたい。

